

問題・解答 用紙番号	22
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
理工学部(住環境デザイン学科・建築学科・都市環境工学科)、
農学部【文系科目型】(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。(一〇点)

- 1 言葉の定義をめぐって論議のシエウシエウがつかない。
- 2 自由という言葉は様々なイメージをカンキする。
- 3 かつて、社会主義体制は多くの人々を魅了し、まだゲンメツもさせた。
- 4 現代民主主義が歩んできたドウテイを振り返る。
- 5 エリートの大衆に対するカイギは現代でも根強い。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四七点)

参加民主主義は、草の根のムーブメントの盛り上がりもあって広く支持を獲得し、多くの研究者がこの理論に市民社会の未来を夢見た。しかし、運動が下火になるにつれてこの理論は段々と魅力を失い、いつしか①口の端にのぼらなくなってしまう。そこで参加民主主義に代わり、一九九〇年代頃から関心を集めるようになったのが「熟議民主主義」である。現在まで、肯定するにせよ批判するにせよ、熟議への関心は民主主義論の中心を占めるようになっていく。こうした動向を民主主義論の「熟議的転回」と呼ぶ研究者もいる。

「熟議」とはふだん聞きなれない言葉かもしれない。これは、ひらたく言えば話し合いやコミュニケーションのことだ。「民主主義のもとでは話し合いが重要である」と言えば、あまりに当たり前前に響くだろう。しかしこれから見ていくように、話し合うことをめぐる理論的かつ規範的な考察は、民主主義とは何かについて深い反省と多くの洞察をもたらしてきた。

熟議民主主義とは、英語の「デリバレイティブ・デモクラシー (deliberative democracy)」の訳語である。ここで「デリバレーション (deliberation)」とは、「熟慮」や「熟考」、あるいは「審議」などを意味している。

そのためこの用語には、「討議民主主義」や「審議民主主義」といった訳語が当てられることもあり、専門家のあいだでも長らく統一した訳語が定まっていなかった。しかし最近では、「熟議」という訳語がそれなりの②市民権を得ているようだ。この訳語の提案者である法哲学者の井上達夫は、次のように説明している。

‘Deliberative Democracy、’という言葉がこの潮流を表現するものとして最近よく用いられるようになっていく。これを私は「熟議の民主政」と訳している。最近では「審議民主主義」だとか「協議民主主義」だとか、いろいろな訳がある。しかし「審議」は審議会のようによくない。また「協議」だけだと弱い。‘Deliberation、’というのは、「熟慮する」のだけれども、一人で熟慮するのではなくて、皆で話し合って熟慮する。「熟慮」という契機はとても重要だし、「協議」という契機も重要なので、二つ合わせて「熟議」という言葉を使わせていただいています。

このように「熟議」という訳語は、皆で熟慮しながら協議する、そうした両方のニュアンスを含んでいると思われるので、以下、「熟議」および「熟議民主主義」を用いることにしたい。

話し合うことの意義を探究するという、いつけんシンプルに見える熟議民主主義論は、ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論を背景としており、これがこの民主主義モデルに深みと広さを与えている。とはいえ、じつさいにはハーバーマスの理論に忠実なものから、必

ずしもそうでないものまで、議論は多種多様である。ここではおおまかな特徴を描写してみよう。

熟議民主主義の特徴の一つは、それが民主主義の手続き主義的な理解^Aにもとづいている点である。確かにいくら話し合いを尽くしても、多様な利害や価値観があるなかで、全員が満足する正解を見つけるのは難しい。そこで熟議民主主義は、公開の討議のなかで、多様な意見から公正な意思決定を行うための手続きを重視し、そうした手続きを経て得られた結論には正統性があると考ええる。これを手続き的正統性と言う。それでは、これはどのような手続きだろうか。これが中心的な論点になる。

重要なのは、話し合いが、合理性や不偏不党性などの諸価値^のに則^{したが}って行われることである。つまり、相手を否定する攻撃的な態度や、「絶対に説得されないぞ」といった姿勢では、望ましい話し合いはとうてい不可能である。

熟議とは、理性的な討論を通じて決定を行うことを目指しており、そのため、概して思い込みや強い党派性、さらには感情的な高まりは抑制すべきものとして位置づけられている（もちろんこの点については論者によって温度差がある）。

さらに熟議では、特定の人々を恣意的な仕方^でで排除することがあつてはならない。原則的には、その決定によつて影響^をを蒙るであろうすべての人々、ないしはその代表者の参加が認められているべきである。ある一部の人々が、正当な理由もなく熟議や意思決定の場から排除されていれば、その決定プロセスは民主的な観点からして望ましいとは言えないだろう。

こうした見方からすれば、教育機関の授業料の改定にかんする審議に学生組織が参加していないかつたり、自治体の重要な話し合いから外国籍という理由で一部の住民を排除することは、熟議のプロセスとして問題があることになる。

^B そのほかの特徴として、熟議民主主義の代表的な理論家であるセイラ・ベンハビブは次の三つを指摘している。

第一に、i。社会的な立場や権力関係を熟議に持ち込むことは、望ましい熟議の条件を破壊するだろう。したがって、熟議は対等者のあいだで行われなければならない。ここには付度^{そだ}やべつらいに居場所は与えられていないのだ。

第二の特徴は、ii、というものだ。もちろん何をテーマに熟議するかはそれ自体きわめて政治的であり、問い直しの機会^はは全員に開かれていなければならない。もし熟議のアジェンダが、特定のマイノリティに対して配慮を欠いたものであつたり、抑圧を追認するようなものであれば、それを見直すことも必要だろう。

そして最後に挙げられるのは、熟議の形式にかんする特徴である。iii。たとえば、参加者が長広舌をふるう男性ばかりの場合、女性が萎縮して発言を遠慮してしまうことが知られている。あるいは、熟議がマジョリティの言語（たとえば英語や日本語のように）で行わ

れた場合、その言語を母語にしない参加者にとっては発言のハードルが上がることになるだろう。そのようなとき、参加者のジェンダーバランスに配慮したり、他言語での通訳や持ち時間を調整するなど、運用ルールを見直す機会があることがますます重要になる。

以上が、熟議民主主義の基本的な特徴である。こうしたモデルは、私たちのふだんの何気ない話し合いとは根本的に異質である。そのため、熟議が意思決定の正統性を保障するものとして機能するためには、単に人々が集まって話し合うだけではうまくいかない。これらの厳しい基準をクリアするための仕組みや工夫、あるいは制度化がどうしても必要になる。この点については後ほど立ち返ることにしよう。

熟議モデルは、民主主義を異なる利益集団間の競争と考える議論と鋭く対立する。つまり、シェンペーターやダールのようなモデルが人々の選好を所与のものとし、その集計を重視するのに対し、熟議モデルは人々の利害や選好をあらかじめ固定されたものとは見ていない。むしろそれらは熟議のなかで形成され、さらには変容するものと捉える点に特徴がある。

さらに、熟議モデルは話し合いの「過程」を重視する。熟議のなかで人々は、単に互いの主張をぶつけ合うだけではない。むしろ主張や選好が根拠とする「理由」を討論の場に差し出し、他者による検証にさらす。公開のもとの検証に耐え、なおも妥当性を主張できる理由のみが認められ、人々と共有されることになる。

以上のような特徴をもつ熟議民主主義は、しばしば「コンセンサス主義」(合意形成主義)と批判されることがある。熟議モデルはあらかじめ満場一致のコンセンサスを前提としており、その結果、異なった意見や主張に対して抑圧的になるのではないかという懸念である。

しかしこれまでの議論で明らかなように、この批判は熟議民主主義の意義をかなりのところ捉えそこなっている。確かに、熟議モデルはコンセンサスの可能性を信じている。しかし、その過程は必ずしも一方向的ではない点に注意しよう。ここでは「反省性」がキーワードになる。つまり熟議では、自分の考え方や思い込みを反省し、吟味し、見直していくことが肝なのであり、それが最終的にコンセンサスを形成するかどうかは、じつは二次的な問題なのである。

政治学者の田村哲樹が「自己の見解を他者の見解に照らして見直していくこと、そしてその結果として、異なる他者の間に共通理解を形成したり、集合的な問題解決を行うことこそ、熟議民主主義の核心である」と述べるように、熟議とは、個々人がみずからの無反省な選好、意見、判断を吟味し、それらをコミュニケーションのなかでたえず変容させていく複雑なプロセスであり、なにがなんでもコンセンサスを形成するといった立場ではないのである。

熟議民主主義が興味深いのは、理論的な研究のみならず、1 かつ実験的な研究としても蓄積されている点だ。たとえば、熟議はじつさいにどこで、どのように行われるのだろうか。これについては、ハーバーマスによる「二回路モデル (two-track model)」がしばしば取り上げられ

る。

まずハーバーマスは、「フォーマルな熟議」と「インフォーマルな熟議」とを区別する。フォーマルな熟議とは、議会や裁判所のように、何らかの決定が必要であるために時間的な制約があり、一般的には熟議のあとで多数決原理にもとづいて決定がなされる、そのような熟議のことである。

他方で、後者のインフォーマルな熟議とは、そのような決定への責任を必ずしも伴わない、市民社会や公共圏で行われるものである。具体的には、政治結社や市民団体、メディアでの討論などがそのような場だろう。原則的に言えば、ここでは決定の圧力も時間の制約もないため、自由で

2 なコミュニケーションによって公論の形成に寄与することが期待されている。

ハーバーマスの構想は、このような二つのタイプの熟議を連関させ、有機的な仕方で結びつけるというものだ。つまり、インフォーマルな熟議の結果がフォーマルな意思決定の場にインプットされ、それが最終的なアウトプット（法や政策）に反映されるとき、政治システムは正統性を調達することができ、民主社会はいつそう安定するだろう。

そこで、熟議民主主義を社会に実装させる方法として、「ミニ・パブリクス」に注目が集まっている。ミニ・パブリクスとは一般に、少人数規模で行われるインフォーマルな熟議の場のことであり、具体的には、討論型市民会議や市民フォーラム、市民陪審、コンセンサス会議などが含まれる。

ここでは、単に人々が集まって話し合うのではなく、それが制度化されている点が重要だ。政治学者の田畑真一が指摘しているように、「発言機会の平等や正確な情報にもとづいた討論が行われることが担保され、「理由の交換」が行われることが保障されるには、制度化が不可欠」なのである。具体的には、討論に適切な構成人数、熟議を実効的にするための訓練を受けたファシリテーターの存在、そして専門知識を教授する専門家の役割などが挙げられるだろう。

ミニ・パブリクスにおける熟議の成果を政策決定に生かそうとするのが、スタンフォード大学熟議民主主義センターのジェイムズ・フィッシュキンが行った「^D討論型世論調査（Deliberative Polling）」である。

まず、討論型世論調査では、ランダムに選ばれた一〇〇〇から三〇〇〇の人々に対し世論調査を行い、その後、彼らに討論フォーラムに参加してもらい、熟議を行ってもらう。これは、一般市民が特定のテーマについて数日間にわたって集中的に熟議し、その過程の前後において彼らの意識や見解がどのように変わったのか、あるいは変わらないのかを実験的に検証する大規模な調査である。

討論型世論調査で重要なことは、無作為抽出によって、社会の縮図となるようなサンプル集団を形成し、代表者として熟議してもらうことである。適切な熟議により導かれた結論は、熟議に参加していない人々を代表するものとなり、十分な正統性と説得力をもつと考えられる。こうして得られた熟議の成果は、議会などのフォーマルな意思決定の場でも傾聴すべきものになるだろう。

それでは、討論型世論調査では、どのような熟議が行われるのだろうか。提案者のフィッシュキン

は、熟議を「市民のひとりひとりが議論において対立する意見を真剣に吟味すること」と捉えたうえで、熟議の質を以下の五つの項目で測っている。

- 1 情報——争点に関係すると思われる十分に正確な情報がどれほど参加者に与えられているか
- 2 実質的バランス——ある側、またはある見地から出された意見を、反対側がどれほど考慮するか
- 3 多様性——世間の主要な立場が議論の中で参加者にどれほど表明されているか
- 4 誠実性——参加者がどれほど真摯に異なる意見を吟味するか
- 5 考慮の平等——参加者のすべての意見が、どの程度、誰が発言者かということではなくその論点自体により検討されているか

話し合いは、それが熟議と呼ぶに^{ふさわ}相応しいものであるためには、この五項目で高得点をマークする必要がある。確かに、私たちの日常の会話を振り返ると、必ずしもこれら五項目を十分に満たしているとは言えない。

それどころか、とりわけ政治について話すのは似たような意見をもつ仲間内だけ、ということが起こりがちである。この傾向はインターネットの普及により急速に強まっており、人々はますます自分の政治的見解に近いものだけに触れていることが指摘されている。熟議は、こうしたコミュニケーションの分断状況を乗り越えることを可能にする。

このような理由から、熟議が単なる話し合いではないことは明らかである。それはある程度、特殊な環境と制度のもとで成立する、特別なコミュニケーションのあり方と言えるだろう。

(山本圭『現代民主主義』一部改変)

問一 波線部①・②の言葉の意味として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|-----------|----------------|
| ① 口の端にのぼる | ② 市民権を得る |
| ア 良い評判をとる | ア 知る人ぞ知るものとなる |
| イ いっせいに話す | イ 意図をよく言いあらわす |
| ウ 批判を受ける | ウ 広く認められて一般化する |
| エ 話題になる | エ 都市住民の間で常識となる |
| オ 互いに言い争う | オ 使用することを求められる |

問一 傍線部 A「民主主義の手続き主義的な理解」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 話し合いは、公開の討議のなかで、多様な利害や価値観を持つ全員が満足する公正な意思決定を導き出すことで、正統性のある結論に達する。
- イ 徹底的な話し合いを通じて、合理性や不偏不党性などの諸価値を実現することが目指されなければならない。
- ウ 感情的な高まりを抑制して決定を行うことのできる範囲内で、全ての人々、ないしはその代表者の参加が認められる。
- エ 相手を否定する攻撃的な態度や、説得されることを拒絶する姿勢は、討論の参加者において差し控えられる必要がある。
- オ 多様な意見の中から公正な意思決定を行うための手続きを重視するか否かについては、論者によって温度差がある。

問二 傍線部 B「そのほかの特徴として、熟議民主主義の代表的な理論家であるセイラ・ベンハビブは次の三つを指摘している」について説明した、本文中の空欄 i、iii に当てはまる最も適切な文を、次のア～カのうちからそれぞれ選びなさい。

- ア 市民社会からのインプットと政治からのアウトプットをつなぐ議題を準備することで、政治の正統性を回復する必要がある
- イ 参加者の誰もが、提案されている議題にかんして異議申し立てができなければならない
- ウ 熟議の参加者は平等であり、誰もが意見を述べ、議論を開始し、疑問を呈する機会を等しくもつことが必要である
- エ 民主主義を国家や議会といった特殊な領域から解放し、私たちの日常に関わるものとして議題を提示しなければならない
- オ 熟議のための会場を確保し、全市民への日当を支払うための諸々の費用は決して安いものではないことを知る必要がある
- カ 熟議が行われるための手続きやルールを再検討する権利が、誰しにも認められていなければならない

問四 傍線部C「『コンセンサス主義』（合意形成主義）と批判される」とあるが、熟議とコンセンサスとの関係についての筆者の見解として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 熟議モデルは、あらかじめ満場一致のコンセンサスを前提としている。

イ 熟議モデルは、紆余曲折^{きうよきせつ}の末のコンセンサスの可能性を信じているとはいいがたい。

ウ 自分の考え方や思い込みを反省してコンセンサス形成に至ることが、熟議の一次的な問題である。

エ 最終的にコンセンサスを形成するかしないかは、熟議における中心的問題ではない。

オ 個々人がみずからの見解をコンセンサス形成のためにたえず変容させていく複雑なプロセスこそが熟議である。

問五 空欄 ・ に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

1 ア 実践的 2 ア 革新的

イ 心理的 イ 合法的

ウ 相対的 ウ 功利的

エ 派生的 エ 国民的

オ 微視的 オ 自発的

問六 傍線部D「討論型世論調査（Deliberative Polling）」について、その成果が、議会などのフォーマルな意思決定の場でも傾聴すべきものだと言われるのはなぜか。本文中の語句を用いて八十字以内で答えなさい。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致しているものにはa、合致していないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア 熟議民主主義は、一時広く支持を獲得した参加民主主義を攻撃し、これを否定することで、民主主義に関する深い反省と多くの洞察をもたらしてきた。

イ 熟議民主主義論は、ユルゲン・ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論に忠実に展開することで、多様な議論を生み出した。

ウ シュンペーターやダールは人々の選好を所与のものと考えているが、熟議モデルは人々の選好を固定的ではなく、熟議のなかで形成され、変容するものと考えている。

エ 熟議民主主義を社会に実装させる方法として注目されるミニ・パブリクスとは、少数規模で行われるインフォーマルかつ制度化された熟議の場を意味する。

オ 熟議とは、インターネットの普及という特殊な環境と制度のもとで成立しうる、特別なコミュニケーションのあり方だと言える。

Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四三三点)

黒と黄褐色が美しい色として流行したのは、色のもつ意味が悪い意味から良い意味へと転換したからというのではない。そうではなくて、両者がともにもっている悲しみの色というイメージが逆に価値をもたれるようになったためで、つまり悲しみの感情^Aに対する価値がマイナスからプラスへと転じたからである。私たちにあって、悲しみは正負の価値では計り難い感情であるけれど、中世では悲しみは怒りと対にされて糾弾され、道徳書は怒りにかられぬために悲しみを避けるよう説いていた。あるいは恋愛の指南書は、悲しみを恋人たるにふさわしからぬ悪徳として教え挙げていた。悲しむひとは胸を打ち、髪をかきむしり、その姿に美しさを感じとっている様子は、少なくとも一一、一二世紀の物語文学にはない。

ところが、一五世紀になると、悲しみに打ち沈み、身をよじつて悲しみに耐える姿にある種の美を感じとるようになったふしがある。たとえば、一五世紀の泣き人の彫像群を見たらよい。人びとはもはや胸を打ったり、髪をかきむしったりはしない。深い頭巾に顔を埋めて、頭を垂れて行列をつくり、あるいは両手を握りしめ、頭巾の陰でそっと涙をぬぐう(図1)。ブルゴーニュ公領の墓に残されているこのような泣き人たちは、愛するひとの死を前にした悲壮感をいかにも美しく盛り

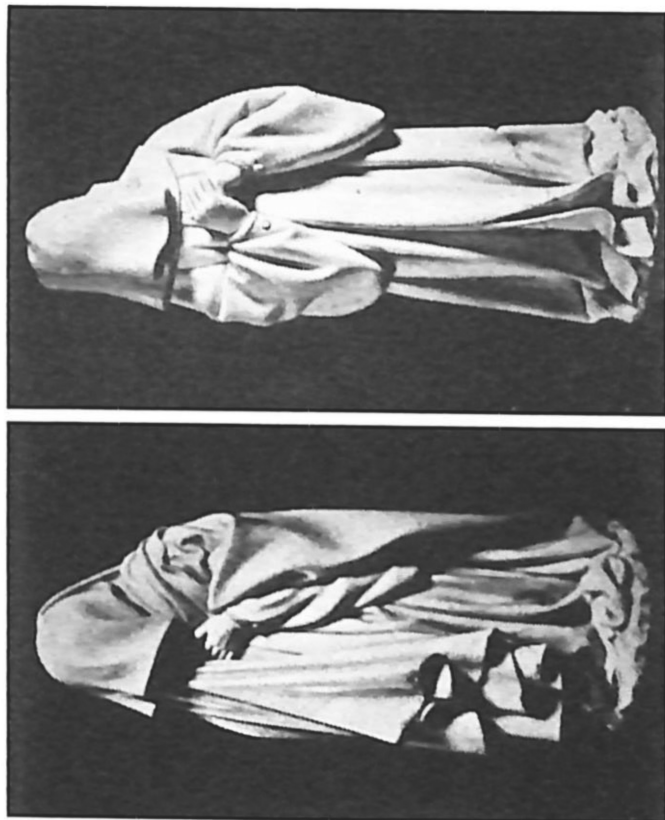


図1 《ブルゴーニュ公フィリップ・ル・アルディ (1404年没) の墓の泣き人》、ディジョン美術館

上げているではないか。ここで悲壮感をいつそうドラマチックにしているのは、身体の仕事もさることながら、丈量豊かな喪服である。身体を包み込んで悲しみの表情を隠し、それでもなお伝わってくる悲しみの感情は表現として極まれる。このように、美しい喪服の誕生は、死を前にして人びとが抱く感情に特別の思いをもたなければありえないだろう。中世末期は悲しみの感情にとくに敏感な時代なのである。おそらく黒が喪の色として定着したものこの時期である。たしかに、白にも紫にも喪

の色としての資格はあつたが、抜きん出て喪のシンボルとなつたのが黒である。中世は悲しみの色としての黒を再発見した時代である。

一五世紀がメランコリックな心情に共感した時代であつたことを示すもうひとつの証し^{*}が涙文の流行である。しずくのかたちをした涙文は一二世紀のアーサー王物語に起源をもつ。たとえば「飲^Bび知らず」の異名をもつ騎士ブランはこれを紋章としている。本来は物語のなかの紋章であつたが、中世末期の貴族が文学のなかのアーサー王の騎士たちを自らの手本とし、その物語に取材して武芸試合をおこなつたことによつて、涙文は^{*}ドウヴァーズとして多用されることになった。その結果、涙模様は衣服や宝飾品から家財道具まで、中世末期の人びとの生活の場をさまざまに彩ることになったのである。「涙の泉の」と冠した武芸試合を、ブルゴーニュ公フィリップ善良公（一三九六―一四六七年）が催したのは、彼が愛書家で騎士道文学に通じ、涙模様にしたしんでいたからである。

そのフィリップが黒いビロードに涙模様をちりばめた、いかにも美しい装いをしたある日のことが、ブルゴーニュ家の事績を記した年代記作家ジョルジュ・シャトランによつて伝えられている。彼は肖像画や写本挿絵のなかでいつも黒装束で描かれているように（図2）、黒の流行を牽引した



図2 《フィリップ善良公》15世紀、
フルーニンゲン美術館

ひととして知られて
いる。シャトランに
よれば、彼が黒い服
を着るようになった
きっかけはやはり喪
服であつた。一四一
九年、フランス王家
との確執のなかで父
公、ジャン無畏公が
暗殺されたとき、惨
殺に衝撃を受けた

フィリップは、その悲しみを一生忘れまいと以後も黒い服を着つづけたというのである。

さて、涙模様のついた彼の黒装束とは、晩年の一四六三年一二月、姪にあたるブルボン家のカトリーヌがヘルダールランド公に嫁ぐ婚礼の際に身につけられた服装のことである。金欄^{きんらん}の衣裳の花嫁のかたわらで、彼は花嫁の介添え役であつたにもかかわらず、いつものように黒ずくめであつた。

……新婦はたいそう豪華な金欄をまとい、一方の公は黒いビロードをまとつていた。この日中、公は黒いビロードの帽子を被り、それには一面に涙と、この世で最も美しい大粒の真珠とが散らしてあつた。それは美しいから作らせたというだけではなく、彼の気持ちに似つかわし

いようでもあった。彼には悩みがあった。この上ない喜びであるはずの一人息子が彼を悩ませ、メランコリーの涙を流させるのだと、彼は言っているようであった。

公は、たったひとりの嫡子である後のシャルル突進公との不和に悩んでいた。この日の婚礼にもシャルル夫妻は欠席している。シャトランは公の装いに主君のそんな心中を察し、心痛めている。フィリップがはたして悩みを訴える意図をもつて涙模様をつけたのかどうかはわからない。おそらく喪服からファッションと化した黒服と同じように、涙模様も単に流行にすぎなかつたのだろうが、とはいえ、黒という色にも涙模様にも憂鬱感が漂っていることにまちがいはない。ここでは洋梨型の真珠も涙を演出しているが、涙の模様は、花に水をやる道具であるジョウロの水滴として、あるいは天空に広がる雲から落ちる雨粒として表され、涙模様の世界は拡大されていった。

すでに一四〇七年、オルレアン公の宮廷ではオルレアン公ルイの死を悼んで、妻のヴァランティヌ・ヴィスコンティが水滴を散らすジョウロをドウヴァーズとしていた。オルレアン公ルイはシャルル六世王の弟にあたり、ブルゴーニュ家との確執のなかでブルゴーニュ公の放った刺客によつて殺された。つまりフィリップ善良公に黒服を着せるきっかけとなった一四一九年の父、ジャン無畏公暗殺はその α であった。

涙模様はジョウロや雨粒へと文様を拡大させていったが、さらにかなわぬ恋を嘆く「愛の悲しみ」をテーマとする抒情詩の流行とともに、辛い恋心のシンボルとして展開し、悲しみの模様はさらに増殖していく。恋するひとは心安まることなく、食欲を奪われ、眠ることもかなわず、^{ぼろぼろ} 茫々と涙をながして長い夜をあかす。辛い心の内を語る歌が一四世紀末から大流行し、涙模様はアーサー王物語ばかりか抒情詩のジャンルにおいても文学的シンボルとして機能することになった。

そのような文学趣味のなかで、悲しい恋の花として登場するのが二色^{すみれ} 堇とオダマキである。二色堇を示すフランス語のパンセ **pensée** は想うという意味をもち、一方のオダマキ **ancolie** はメランコリー **mélancolie** の音に近いために、いずれも β によつて悲しい恋のシンボルとなったのである。愛するひとの死がもたらす悲しみ、かなわぬ恋がもたらす苦悶、そんな悲嘆の気持ちが豊かな表象の世界をかたち作っていく様子には、メランコリックな時代の心性を感じないわけにはいかない。

中世末期が悲しみの感情にこだわったことは尋常ではない。^C『黒色と呼ばれる女性とタンニン色と呼ばれる女性の論争』と題し、どちらがより不幸かを競争する作品さえある。黒色の服を着た女性とタンニン色の服を着た女性が、それぞれの不幸な恋を語る。黒色の女性は毎日、恋するひとを「眼で見る」ことができるのだが、「望むことはなにひとつ彼から得ることはできない」。一方のタンニン色の女性は、相思相愛だが愛するひとが不在で、会うことも、声を聞くこともかなわない、それに使りもない。はたしてどちらがより不幸なのかという論争である。

作品中の二人の女性は、それぞれの主張の支持者として詩人シャルル・ドルレアンに近い二人の

女性を引き合いに出しており、ゆえに作者はシャルル・ドルレアンともいわれるが、確証はない。すなわちタンニン色の女性にくみするのは妻のマリー・ド・クレヴであり、黒色の女性にくみするのは弟ジャンの妻マルグリット・ド・ロアンである。

シャルル・ドルレアン（一二九四―一四六五年）は先述のオルレアン公ルイとヴァランティヌ・ヴィスコンティの間に生まれた貴公子である。一五世紀を代表する抒情詩人として誉れ高い。母、ヴァランティヌはすでに述べたように、夫の死に接して水滴を放つジヨウロをドウヴィーズとしたひとであり、イタリアのヴィスコンティ家からオルレアン家に嫁し、宮廷のさまざまな陰謀に翻弄されたあげく、夫の死後、一四〇八年に追うように亡くなった。残されたシャルル・ドルレアンは父公暗殺の訴訟の成り行きに弄ばれ、一四一四年ようやく裁判が決着して心の平安を取り戻したのも束の間、翌年アザンクールの戦いに負けたフランスの担保としてイギリスに連れて行かれた。そして二五年におよぶロンドンでの幽閉生活の後、フランスに戻った一四四〇年に三度目の結婚で、マリー・ド・クレヴを妻とした。このときマリーは一四歳、シャルルは四五歳であった。

クレヴ家の出身であるマリーは、叔父にあたるブルゴーニュ公フィリップの宮廷で育てられている。つまりブルゴーニュ家とオルレアン家の確執からすれば、二人の結婚は政略結婚以外のなにものでもないが、文学を通じた二人の結婚は幸せだったようにみえる。マリーはブルゴーニュ家の華麗な文化を身につけ、公の文学趣味をおそらく学んだのであろう。ヴァランティヌのジヨウロ

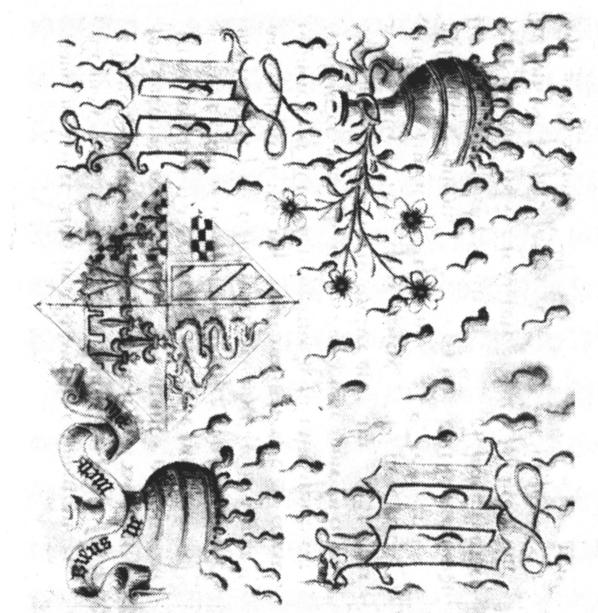


図3 《マリー・ド・クレヴのドウヴィーズ》
15世紀、フランス国立図書館

の紋章を踏襲したばかりか、さらに三色暈を加えて自らのドウヴィーズとし（図3）、そこに時代の文学への愛好が見られるからである。悲しい恋の表象である涙と三色暈、あるいはオダマキの模様は、宝飾品から生活の調度品まで彼女の生活を飾ったことを記録が伝えている。一方、夫のシャルル・ドルレアンは、異国での幽閉生活という青春時代の経験から物憂いメランコリー的情感の漂った詩をつくる。そのメランコリックな心情をシンボリックに表

す色がタンニン色であった。

一四世紀には、たとえばシャルル五世の宮廷で活躍した詩人ウスターシユ・デシヤンの歌が示していたように、失恋の気持ちは黒で表されるのが常套（じょうそう）であった。五月祭には緑の服を着て、恋人と芽吹いた森の緑を摘みに行く習慣だったが、恋人のいないひと、失恋をしたひとは「心は緑の代

わりに黒をまとう」と心情を吐露していた。しかし、一五世紀のシャルル・ドルレアンの世界では、このような心情を語る色はもっぱら黄褐色である。〈不安〉〈悲しみ〉〈物憂さ〉〈メランコリー〉など擬人化された心情表現は彼の詩のそこかしこに登場し、シャルル・ドルレアンの憂鬱な心はいつもタンニン色で、「心はタンニン色とあ纏あせた緑色をまとう」。

黒服の女とタンニン色の服の女が、どちらがより不幸かを論争するという作品は、このような鬱悶のオルレアン家の宮廷で生まれたのである。

7

ブルゴーニュ公の年代記作家シャトランがあまりにくりかえし語り過ぎたために、フィリップが黒い服の流行をリードしたとする言説が広まってしまったが、フランスではすでに一二八〇〜一二九〇年代に黒の流行がはじまったと推測されている。それはシャルル六世（一二六八〜一四二二年）の治世下で、同王が黒服で描かれている写本挿絵はたしかに多い。黒服の流行がどのようにしてはじまったのか、未だ詳細はあきらかにされていないが、一四世紀半ば頃にイタリアで盛んに出されたD贅沢禁止令が契機となったことが考えられている。

禁令は身分秩序の維持という政治的理由、派手な装いを戒める倫理的理由、あるいは莫大な出費を抑制する経済的理由など、その比重は時代と地域によつてさまざまだが、どこの国でも中世の早くからくりかえされてきた。禁令によつて黒い服が強制され、もちろんそれに皆が従ったわけではないけれど、黒を着る機会が増えることにより、美しい黒に染める染色技術が開発され、それが黒服の流行につながったというのである。布を漆黒に染めることはやさしいことではない。黒く染めるにはクワの実やクルミの樹皮などが役に立ったが、もちろん美しい黒に染めることは不可能である。漆黒に染めるには藍とアカネを何度も重ねて染色しなければならないが、藍が勝てば青っぽくなり、アカネが勝てば茶色になり、深い黒色をだすことは難しかった。

しかし美しい黒が実現されたとき、黒の好尚は汎ヨーロッパの規模で広がった。上述の涙の泉の武芸試合のほか、盛大な武芸試合を何度も開いていたブルゴーニュ家の宮廷には、ポルトガルやカステイリヤからスコットランドにいたるヨーロッパ各国から騎士たちが参集し、彼らがそろって黒装束であつたことが伝えられているからである。つまり黒服の流行は市民から貴族にいたる、ヨーロッパの広い範囲で共有されたきわめて大規模な色の好尚である。『色彩の紋章』の作者シシルは、ブルゴーニュ公領のエノーの役人であり、アラゴン国のアルフォンソ五世に仕えたひとである。中世の人びとはヨーロッパの広い地域を活動の場とし、各宮廷の武芸試合を渡り歩き、もとより宮廷間には婚姻による姻戚関係もあつて、きわめて汎ヨーロッパ的なネットワークが形成されていた。黒の流行はそのようなヨーロッパ中世末期の文化を象徴する現象であり、一過性の流行には留まらない、息の長い好尚として後の時代へと受け継がれていくのである。結局、今日にいたる紳士服の黒服は、さかのぼればここに誕生しているといつてよい。

フィリップ善良公を黒の流行の指導者とする神話が誕生したのは、ブルゴーニュ家の宮廷が支配

下に置いたフランドル地方の毛織物産業による経済力に支えられ、フランス王家を凌ぐ文化を享受していたからである。武芸試合という祝祭の度重なる開催もそれゆえであり、洗練された文化はヨーロッパの宮廷の規範とさえた。その意味でブルゴーニュ公の宮廷が黒の普及に貢献したことはまちがいない。

フィリップ善良公は一四六七年に亡くなり、一人息子のシャルル突進公は一四七七年に惨殺される。残されたシャルルの一人娘のマリーは同年ハプスブルク家の神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世（一四五九―一五一九年）に嫁ぎ、黒の好尚はマリーの結婚を通してやがて一六世紀に全盛期を迎えるスペイン宮廷に受け継がれていくとみるのが定説である。すなわちマクシミリアンとマリーの息子フィリップ・ル・ボーは、スペイン王位の継承者カステイリヤ王国のジャンスと結婚し、やがてスペイン王となる。彼らの子カール五世（在位一五一九―一五五六年）の統治下にスペインは隆盛をきわめ、当然ながらその作法が各国へ影響し、黒の好尚もその一部であった。また同じ世紀に、プロテスタントによる黒の倫理が説かれるという、もうひとつの黒の正当化があった。こうして黒い服の地歩は固まった。

（徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』一部改変）

* 涙文……一三世紀の『アーサー王物語』を起源に持つしずくの形をした模様。涙模様。

* ドウウイズ……簡潔な言葉と図像から構成される象徴的な図案。その図案を身につけている個人の性格、思念、意図、願望などが表現される。

問一 傍線部A「悲しみの感情」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 元来、悲しみは美しい感情とみなされていたのであって、中世における黒のもつ意味が反転したというわけではない。

イ 恋人を失ったときの悲しみは、胸を打って髪をかきむしるよう指南されるほど、一二、一三世紀には重視された感情だった。

ウ 一五世紀になると悲しみの感情が非難されたため、人びとは胸を打ったり、髪をかきむしったりすることを避けるようになった。

エ ブルゴーニュ公領の墓の彫像が醸し出す悲しみの感情は、たつぷりとした衣の生地と身振りで表情を覆い隠すことによって表された。

オ 一五世紀における悲しみの感情は、庶民によるアーサー王物語への憧れが高じて、宝飾品や家財道具の涙模様に結実した。

問一 傍線部B「アルゴ・ニコ公フィリップ善良公」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア フィリップ善良公が伝説の騎士ブランに倣った装いで武芸試合に出場したのは、彼が騎士道物語に通じていたからである。

イ フィリップがしずくのモチーフをあしらった黒装束で知られているのは、写本挿絵とともに文字資料がそれを伝えているからである。

ウ フィリップが黒装束を身にまとうようになった契機は、みずからの父を暗殺したフランス王家への復讐を誓ったからである。

エ フィリップが姪の婚礼時に身につけた大粒の真珠が洋梨型をしているのは、それが涙のしずくを連想させる形だからである。

オ フィリップが姪の婚礼時に暗い色の服を着たのは、雨粒を降らせる厚い雲の暗さがメランコリーの象徴だからである。

問二 空欄 α ・ β に入る最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|---------------|-----------------|
| α ア 代償 | β ア ことば遊び |
| イ 原因 | イ アナグラム |
| ウ 畏服 | ウ 縁起かつぎ |
| エ 報復 | エ メタファー |

問四 傍線部C「黒色と呼ばれる女性とタンニン色と呼ばれる女性の論争」とあるが、タンニン色と呼ばれる女性と、作者とされるシャルル・ドルレアンの両者が抱くメランコリーについて説明した次の文の空欄【 X 】・【 Y 】を、本文中の語句を用いてそれぞれ二十五字以内で補いなさい。

タンニン色の女性の【 X 】という状況と、シャルル・ドルレアンの【 Y 】という経験が重なるため、両者が抱くメランコリーは類似していると考えられる。

問五 空欄 ア には次の五つの文が入る。正しい順番に並び替えたとき、二番目と四番目に
来る文はどれか。それぞれ次のア～オのうちから選びなさい。

ア ジェイーン・アシェルフォードによれば、夫を亡くした女性が「黒いガウン」 **black
nightgown** と「黄色の上着」 **yellow waistcoat** を着たと記す日記があるといい、涙や雨粒
の模様の刺繡された当時の服飾遺品も残されている。

イ とはいえ、悲しい黒とタンニン色への好尚は、彼らの個人的な趣味でかたづけられるもの
ではない。

ウ 一六世紀のイギリスに同じような例があるからである。

エ しかも黒と黄色を悲しみの色とする感情は、一五世紀フランスの宮廷社会にとどまるもの
ではなかった。

オ オルレアン家はブルゴーニユ家ともアンジュー家とも文学交流のあったことが知られ、そ
れを証すように涙模様がいたるところで流行しているからである。

問六 傍線部 D「贅沢禁止令」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ジョルジュ・シャトランがフィリップ善良公治世下で施行された贅沢禁止令について語つ
た内容が黒服の流行の発端となった。

イ 一四世紀半ば頃に身分秩序の維持という政治的な狙いで発布されたフランスの贅沢禁止令
が、黒服流行の端緒となった。

ウ 贅沢禁止令が黒に代表される慎ましい服を着用するよう強制したことによつて、人びとの
放埒な出費は抑制されることとなった。

エ 贅沢禁止令によつて、クワの実やクルミの樹皮による従来の黒色よりも藍とアカネによる
深い黒色の人気が高まった。

オ 贅沢禁止令下における美しい黒の発明の背景には、もともと武芸試合に出場する騎士の黒
装束に対する憧れがあつた。

問七 傍線部E「黒い服の地歩」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 「涙の泉の」武芸試合は、ポルトガルやカステイリヤ、スコットランドにいたるヨーロッパ各地で開催され、黒の好尚の発信源となった。

イ ブルゴーニユ家の宮廷で開かれた武芸試合に各地から集まった騎士たちは、黒服の流行を支えた汎ヨーロッパ的なネットワークの一端を担った。

ウ 黒の普及が果たされたことで、ブルゴーニユ家の宮廷が支配下に置くフランドル地方の毛織物産業はよりいっそうの発展を遂げた。

エ 美しい黒の生産技術は、フィリップ善良公の孫娘マリーが神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世に嫁ぐことで汎ヨーロッパ的に広がった。

オ カール五世統治下のスペインにおける黒の好尚は、プロテスタントが説く黒の倫理に端を発するものであるため、今日まで続いた。